

寝屋川市所在

讃良郡条里遺跡 (その3)

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

序 文

讃良郡条里遺跡は寝屋川市東部に位置し、条里型地割が残っていることで知られている遺跡です。本報告の調査対象地は、枚方丘陵西端から河内平野へ移行する地点にあたります。調査地北東部の枚方丘陵西端には太秦古墳群や国史跡の高宮廃寺・高宮遺跡など、周辺には重要遺跡が数多くあります。秦氏に関する地名もあり、古墳時代には渡来人が移り住んだことも知られています。

調査では平安時代前期の集落跡が検出されました。掘立柱建物は柵あるいは塀に囲まれ、井戸も見つかっています。この集落は大規模とはいえませんが、古代の官人が身に着ける石製腰帯具が出土していますので、官衙に関する集落が考えられます。また、この調査区の北東部で実施した調査区では、奈良時代の人面墨書土器や絵馬など祭祀遺物が多量に出土しているため、公的な祭祀に関する祓やまじないの儀式が行われたとみられ、本調査区との関連性が想定されます。

最後に、調査にあたってご助力、ご支援をいただいた関係諸機関、地元関係各位に深く謝意を表したいと思います。

2004年3月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野正好

例 言

1. 本書は、第二京阪道路（大阪北道路）建設に伴う、讀良郡条里遺跡（その3）の発掘調査報告書である。調査地は大阪府寝屋川市高宮・小路に位置する。
2. 本調査は、国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと財団法人 大阪府文化財センターが実施した。
3. 現地調査は調査部長玉井功、中部調査事務所長藤田憲司および調査第一係長一瀬和夫の指導により、調査第一係主査前田義明が担当した。現地調査は平成14年3月22日～平成15年2月28日までの期間で実施した。
4. 本書作成に係わる整理作業は、京阪支所長渡邊昌宏および調査第五係長秋山浩三の指導の下、前田が担当した。
5. 本書で用いた現場写真は調査担当者が撮影し、遺物撮影は中部調査事務所主査片山彰一・調査補助員米子千智、京阪支所主査上野貞子が担当した。井戸出土木製品の樹種鑑定は中部事務所主査山口誠治が行った。
6. 調査にあたっては、関係諸機関をはじめ、以下の方々から御教示ならびに御指導を賜った。記して感謝の意を表する（順不同、敬称略）。
塩山則之・濱田延充（寝屋川市教育委員会）、野島稔（四條畷市教育委員会）、福岡晃彦・赤塚次郎（愛知県埋蔵文化財センター）
7. 現地調査および遺物整理・報告書作成作業には下記の方々に参加を得た。
宮本飛鳥 田中正子 泊清治郎 文谷由紀江 松井章子
8. 本書の執筆と編集は前田が行った。
9. 本調査で出土した遺物、および写真図面類は、財団法人 大阪府文化財センターで保管している。広く活用されることを希望する。

凡 例

1. 本書で使用している座標は、日本測地系第VI系に準拠している。
2. 遺構実測図に付した方位は、全て座標北を示している。
3. 標高は東京湾平均海水面（T. P.）を用いた。
4. 本書で使用した土壌色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」2002年版を用いた。
5. 遺構番号は報告書作成時に調査中の番号を変更している。新番号と旧番号の対応は、表の通りである。

遺構番号対照表

変更後(新)	変更前(旧)	変更後(新)	変更前(旧)	変更後(新)	変更前(旧)
溝1	溝121	P4	P11	P34	P5
溝2	溝122	P5	P15	P35	P3
溝3	溝123	P6	P16	P36	P1
建物4	建物124	P7	P17	P37	P38
建物5	建物2	P8	P18	P38	P82
建物6	建物3	P9	P19	P39	P81
柵列7	柵列125	P10	P20	P40	P80
柵列8	柵列126	P11	P41	P41	P85
柵列9	柵列6	P12	P89	P42	P84
柵列10	柵列7	P13	P114	P43	P83
柵列11	柵列8	P14	P103	P44	P97
柵列12	柵列9	P15	P76	P45	P49
井戸13	井戸1	P16	P77	P46	P54
溝14	溝24	P17	P118	P47	P56
溝15	溝25	P18	P88	P48	P59
落込み16	落込み11	P19	P104	P49	P53
溝17	溝37	P20	P87	P50	P112
土坑18	土坑2	P21	P113	P51	P111
土坑19	土坑14	P22	P79	P52	P93
土坑20	土坑10	P23	P90	P53	P92
土坑21	土坑16	P24	P70	P54	P117
土坑22	土坑12	P25	P63	P55	P21
溝23	溝26	P26	P51	P56	P22
溝24	溝38	P27	P52	P57	P73
土坑25	土坑3	P28	P119	P58	P95
土坑26	土坑120	P29	P24	P59	P46
溝27	溝127	P30	P6	P60	P94
P1	P14	P31	P4	P61	P86
P2	P13	P32	P2		
P3	P12	P33	P39		

目 次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
第3章 調査成果	5
第1節 基本層序	5
第2節 遺構	5
第3節 遺物	20
第4章 まとめ	31

挿 図 目 次

図1 調査位置図	1
図2 調査区配置図	2
図3 周辺遺跡分布図	3
図4 1区北壁(A-B)・下層確認トレンチ(C-D)断面図	6
図5 1区西壁(E-F)断面図	7
図6 第1面平面図	8
図7 第2面平面図	9
図8 第3面平面図	10
図9 第4面平面図	11
図10 建物4・5遺構図	12
図11 建物6遺構図	13
図12 柵列7~12遺構図	14
図13 井戸13遺構図	15
図14 溝17遺構図	15
図15 土坑19・22遺構図	16
図16 土坑20・21遺構図	16
図17 溝23・24北西部遺構図	17
図18 土坑25遺構図	18
図19 溝27断面図(G-H)	18
図20 土坑26遺構図	19
図21 出土遺物 縄文土器	20
図22 出土遺物 土坑21	21
図23 出土遺物 井戸13・土坑・落込み・溝・ピット・第2層	22
図24 出土遺物 第2層	24
図25 出土遺物 第3層	24

図26	出土遺物	石製品・土製品	25
図27	出土遺物	木製品 1	27
図28	出土遺物	木製品 2	28
図29	出土遺物	木製品 3	29
図30	出土遺物	木製品 4	30
図31	讚良郡条里復元図		32

表 目 次

表 1	木製品観察表	26
-----	--------	----

図 版 目 次

写真図版 1	航空写真	1. 調査地遠景 (南西から) 2. 調査地遠景 (南から)
写真図版 2	航空写真	垂直写真 (1区第2面)
写真図版 3	遺跡	1. 1区第1面全景 (北から) 2. 1区第2面全景 (北から) 3. 1区第3面全景 (北から)
写真図版 4	遺跡	1. 2区第2面全景 (西から) 2. 2区第3面全景 (西から) 3. 2区第4面全景 (西から)
写真図版 5	遺跡	1. 1区第2面建物 4 (北から) 2. 2区第2面柱穴群 (東から) 3. 2区第4面溝27 (北西から)
写真図版 6	遺跡	1. 確認トレンチ 2 全景 (南から) 2. 確認トレンチ 2 流木 (西から) 3. 1区北壁断面 (南から)
写真図版 7	遺跡	1. 1区第2面井戸13 (東から) 2. 2区第3面土坑21 (北から) 3. 2区第3面土坑21 (南東から)
写真図版 8	遺跡	1. 溝 1 (西から) 2. 溝17 (北西から) 3. 土坑22 (南から) 4. 土坑20 (北東から) 5. 溝23 (北西から) 6. 溝23・24 (北西から) 7. 土坑26 (北東から)

	8. 土坑25 (北東から)
写真図版9 遺跡	1. 建物4-P1 2. 建物4-P2 3. 建物4-P10 4. 建物4-P11 5. 建物4-P7 6. 建物4-P8 7. 建物5-P15 8. 建物6-P24
写真図版10 遺跡	1. 建物6-P25 2. 建物6-P27 3. 柵列9-P40 4. 柵列9-P38 5. 柵列11-P45 6. 柵列11-P46 7. 柵列12-P52 8. 柵列12-P54
写真図版11 遺物	1. 縄文土器 2. 石製品 (1・2)・土製品 (3)
写真図版12 遺物	出土土器1 6・7・9・10:土坑21 69:第3層 43:P15
写真図版13 遺物	出土土器2 32:溝17 60・72・73:第3層 24:井戸13 36:P15 44:土坑22 45:土坑20 48:P55
写真図版14 遺物	1. 出土土器3 井戸13 2. 出土土器4 28・35:土坑18 59・64:第3層 33:P56 39:P1 40:P32
写真図版15 遺物	出土木製品1 井戸13
写真図版16 遺物	出土木製品2 井戸13
写真図版17 遺物	出土木製品3 井戸13
写真図版18 遺物	出土木製品4 井戸13

第1章 調査に至る経緯

本調査は、第二京阪道路建設に伴って実施した寝屋川市小路・高宮地内の発掘調査である。当該地域では2000年から2001年にかけて小路遺跡や讃良郡条里遺跡の確認調査が実施され、2001年には高宮遺跡の発掘調査が行われた。本報告が含まれる2002年には、高宮遺跡(その2)(その3)、小路遺跡(その2)(その3)、讃良郡条里遺跡(その1)(その2)(その3)の3遺跡・7地区に分割して発掘調査を実施した。本調査は、そのうちの讃良郡条里遺跡(その3)の発掘調査報告書である。

讃良郡条里遺跡(その3)は2002年調査の西端部にあたり、調査面積は1851m²である。調査区は南北に長い敷地のため南と北に分割し南半を1区、北半を2区とした。1区終了後に請負業者が交代することとなり、一時中断して2区の調査を行った。

調査の地区割は(財)大阪文化財センターが定めた「遺跡調査基本マニュアル」(1988年)に基づき、日本測地系の国土座標第VI系を基準として遺物の取り上げや遺構実測図面の作成を行った。水準については東京湾平均海面(T, P.)を用いた。

発掘調査は、まず最初に盛土層と盛土以前の耕作土層を機械掘削で除去し、以下を人力で掘削した。人力掘削にあたっては、1層ごとに掘り分け、各層の上面で遺構・遺物の検出に努めた。最下層では自然流路の堆積を示していたため、下層確認のために南端部に下層確認トレンチ1と中央部に下層確認トレンチ2を設定した。下層確認トレンチ1では遺物は出土しなかったが、下層確認トレンチ2では縄文土器が出土した。

第2面と第3面の平面測量についてはヘリコプターによる写真測量を実施し、1/50の平面図を作成した。また、個別の遺構については1/10・1/20の区面を随時作成した。

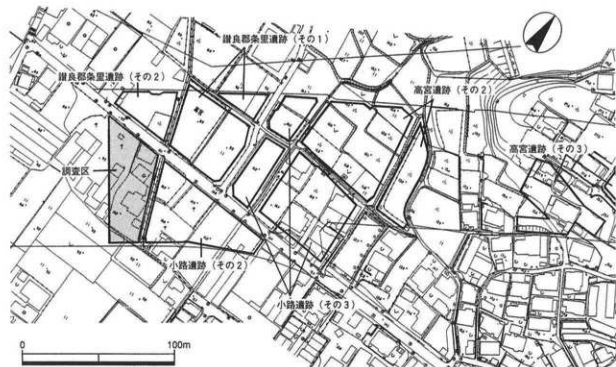


図1 調査位置図

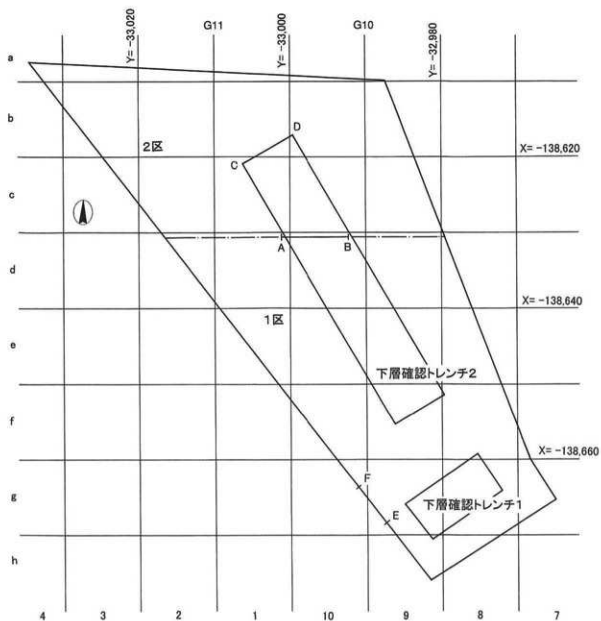


図2 調査区配置図

参考文献

一瀬和夫・田中龍男ほか編 2002年『讚良郡条里遺跡・小路遺跡・打上遺跡・茄子作遺跡・藤阪大亀谷遺跡・長尾窟跡群・長尾東地区』（財）大阪府文化財センター調査報告書 第77集

一瀬和夫・田中龍男ほか編 2003年『門真西地区・讚良郡条里遺跡西地区・讚良郡条里遺跡・大尾遺跡・太秦遺跡・太秦古墳群・打上遺跡・寝屋南遺跡・寝屋東遺跡・弘部南遺跡・東倉治遺跡・津田城東地区』（財）大阪府文化財センター調査報告書 第93集

（財）大阪文化財センター 1988年『遺跡調査基本マニュアル』

第2章 遺跡の位置と環境

調査地は枚方丘陵の南端部に位置し、寝屋川市高宮・小路地区に所在する。枚方丘陵の縁辺部は段丘斜面が複雑に入り込み、谷筋が多く形成されている。谷筋では砂防と灌漑用の溜池が造られ、段丘崖面では大阪層群が露出している箇所も見られる。調査地は枚方丘陵に接する沖積層上に立地している。現在の調査地周辺は調査前に工場や居住地として利用されていたが、南方は水田や畑地が広がっている。

讃良郡条里遺跡は大阪府寝屋川市と四條畷市にまたがり、南北2.6km、東西1.65kmの広範囲にわたる遺跡である。本調査区の讃良郡条里遺跡（その3）は、讃良郡条里遺跡の東端部にあたり、東に高宮遺跡と小路遺跡に隣接している。

調査地周辺の遺跡をみると、旧石器時代から古代まで、各時代の遺跡が分布している。旧石器時代では調査地より北方から東方へかけての丘陵上に立地する伝寝屋長者屋敷跡遺跡、太秦遺跡、高宮遺跡、讃良川遺跡でナイフ形石器が出土している。縄文時代には、高宮遺跡で土坑から前期の北白川下層式や大歳山式の土器片、石鎌・石錐・石匙が出土している。また、調査地より南方400mの讃良川遺跡では中期初頭から後期初頭にかけての遺構が検出され、貯蔵穴・溝・土坑から土器や石器が多量に出土している。晩期の遺跡としては、高宮八丁遺跡と長保寺遺跡がある。

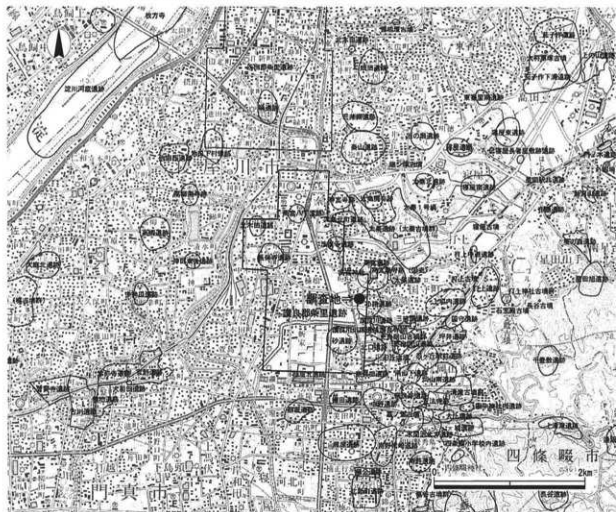


図3 周辺遺跡分布図

弥生時代になると高宮八丁遺跡で、前期から中期にかけての遺構が検出されている。主な遺構には溝・落込み・土坑・柱穴・貯蔵穴などがあり、前期第Ⅰ様式古段階から中期第Ⅲ様式までの土器・土製品・木製品や石器がみられる。石包丁や鍬・鋤などの農耕具が多く出土し、弥生時代前期から中期の村の様子がわかる資料である。丘陵上では太秦遺跡や打上中道遺跡がある。太秦遺跡では中期第Ⅱ様式の土器や石器、打上中道遺跡では後期の土器が出土している。調査地に隣接する小路遺跡は昭和52年に小学生によって発見された遺跡で、水田の耕作土から後期第Ⅴ様式の土器片が見つまっている。

古墳時代に入ると、長保寺遺跡で中期から後期の集落跡が見つまっている。主な遺構としては掘立柱建物・井戸・土坑・溝などが検出されている。出土遺物は土器類・土製品・石製品・金属製品・木製品など量・質ともに豊富である。注目される遺物としては、井戸枠に転用されていた建築部材の扉材や船材がみられる。古墳時代の建築や船を復元する上での貴重な資料である。長保寺遺跡の北方に位置する高宮八丁遺跡でも土坑・溝・自然河川が検出され、古墳時代後期の土器や木製品が出土している。丘陵上に分布する古墳として太秦古墳群がある。古墳群の中央部に位置する太秦高塚古墳は、直径35m、高さ約6mの円墳である。古墳は三段築成で、周濠がめぐる。太秦高塚古墳以外は、浄水場建設や住宅開発によって大半が消滅しているが、土器・埴輪・金属製品が出土している。第二京阪国道の調査においても、太秦古墳群で石室を持たない木棺直葬の古墳が密集して検出されている。その他、後期古墳として横穴式石室が開口している寝屋古墳や、終末期古墳の石室殿古墳がある。石室殿古墳は角閃石花崗閃緑岩をくりぬいて造った横口式石槨として貴重な古墳である。三味頭遺跡は墳丘部が削平されてはいるものの、周濠が確認され方墳と判明した。円筒埴輪や朝顔形埴輪・形象埴輪が出土している。

古代になると仏教寺院が出現する。周辺では白鳳寺院として高宮庵寺と讀良寺跡がある。高宮庵寺は式内社の大社御祖神社境内一帯に所在し、国史跡として指定されている。塔跡が残っており、薬師寺式伽藍配置と想定されている。讀良寺跡は白鳳時代の瓦が出土しているが、伽藍配置は不明である。高宮庵寺周辺では古墳時代から奈良時代の集落跡も見つかり、高宮遺跡として周知されている。高宮遺跡では掘立柱建物・竪穴住居・井戸・石組み施設などが検出されている。打上遺跡や三味頭遺跡でも掘立柱建物群が見つまっている。平安時代の遺跡としては、高柳遺跡や神田東後遺跡、長保寺遺跡などの集落跡がある。

このような重要遺跡が点在している地域であり、今後の調査にも注目される。また、讀良郡条里遺跡は地表に残されている地割によって命名された遺跡であるが、発掘調査から条里制の造営時期を確認することが必要となる。

参考文献

寝屋川市史編纂委員会編 1998年『寝屋川市史』第1巻

第3章 調査成果

第1節 基本層序

1層は耕作土層で20～30cm程度の厚さがあり、調査区全面にわたって認められる層である。その上に現代盛土層が20～80cmあり、水田や畑地などの耕作が行われていたことを示している。2層は床土層で1区の南半では2-1層と2-2層が認められる個所もある。2-1層と2-2層上面で鋤溝を検出した(第1面)。3層は1区北半から2区へかけて認められ、3-1～3層に分類できる。微砂や細砂を主体とし、氾濫の堆積と思われ、30～40cmほどである。1区南半ではみられず削平された可能性がある。3層上面(第2面)で平安時代の遺構を検出した。3層からは古墳時代から奈良時代にかけての遺物が混在して出土している。4層上面(第3面)では古墳時代の溝や土坑が検出されたが、遺構の密度は薄く4層の上面が水平であるため、上部は削平されていると思われる。4層は全域にわたって認められる黒色土層で、厚さ20～30cmを測る。4層からは時期を確定できる遺物が出土していないため判定しづらいが、弥生時代と思われる。5-1層はオリブ黒色、5-2層は黒褐色の泥砂層で、部分的に5-1層が消滅し、5-2層のみの個所もある。5-1層上面が最終面(第4面)で、流路や土坑を検出したが、遺物は出土していない。

4層と5層は安定した水平堆積であるが、下層確認トレンチ2では砂礫層とシルト層を主体とする流路堆積である。流路の上層は細砂や微砂などの細かい砂で、下層ほど礫を含む砂礫層となる。砂礫層は木の枝や木の葉などの有機物を多く含み、縄文土器やサヌカイト片が出土している。確認トレンチ2の南半部ではシルト層に埋没した大きな木根がみられ、島状となっているため、流されてきたものではなく、この場所で自生していたものと思われる。流路の方向は南東から北西へ流れている。

第2節 遺構

1. 第1面の遺構(図6)

第1面は耕作土層と床土層を除去した面で検出した遺構群で、全面にわたって鋤溝群を検出した。鋤溝群は南北方向と東西方向が見られ、真北に近い方向と調査区北部の一角では、北で西へ振れる方向の南北溝や、直交する東西溝がみられる。真北方向及び直交する溝群は、讚良郡条里の区割りに平行する溝群で、条里に沿った耕作用の鋤溝といえる。当該地が近代まで水田として利用されていた結果である。真北方向にのらない斜め方向の溝は、真北方向よりも新しい溝で、区画及び土地利用が変更された結果であろう。盛土後に攪乱坑が多数掘り返されている。下層が粘土層であるため、粘土採取坑とも考えられる。後にゴミ穴にされたのであろう。第1面は南から北へ勾配があり、水は北へ流れる。調査区東側の用水路も同様である。第1面の鋤溝群は重複が激しく、中世の土器や瓦器も出土しているが、大半の溝は近世に属すると思われる。

溝1

調査区南端部で検出した東西方向の溝。幅は1.3m、深さは0.3mを測る。溝は何度も掘りなおしが行われ、重複が激しいために、溝が掘削された時期を判定するのは困難であるが、溝内の遺物や層位からみると近世に相当する。近代になり水田が埋め立てられ盛土が行われたときに、最終的に溝が埋められている。水田の用水路が必要でなくなったためであろう。現況では削平されているが、溝1を境にして南

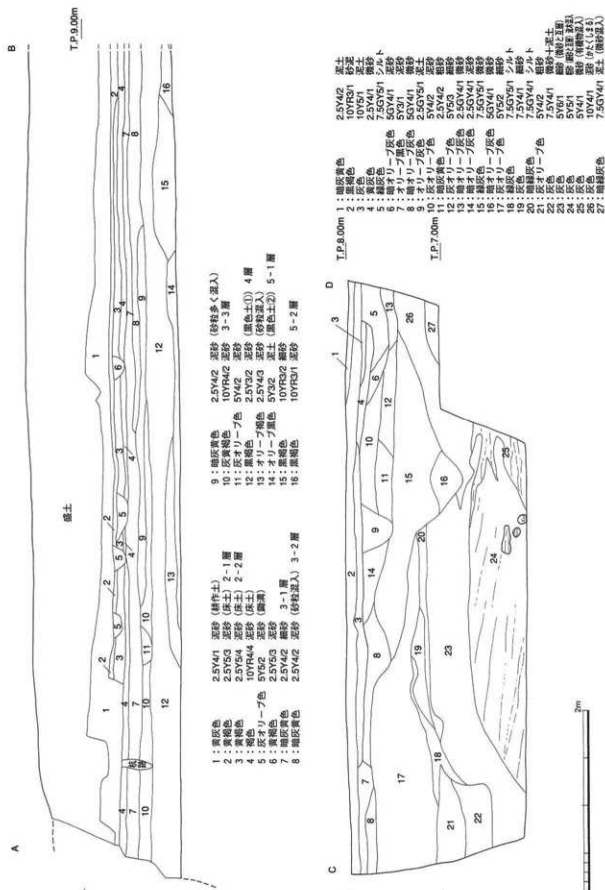


図4 1区北壁 (A-B)・下層確認トレンチ (C-D) 断面図

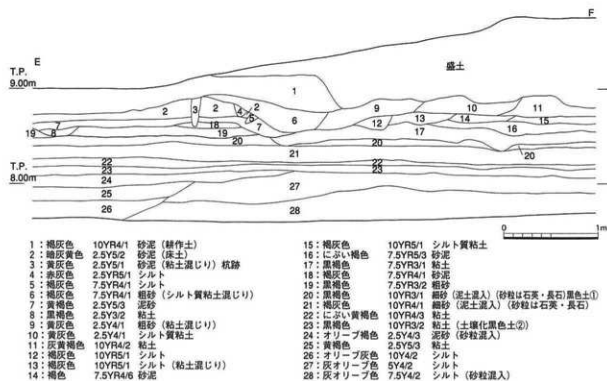


図5 1区西壁 (E-F) 断面図

側の水田面が一段高くなる。調査区の南側では比高差0.5mの一段高い水田面が残されている。溝1の検出した長さは20mほどであるが、真北方向にほぼ直交する東西溝である。溝1からは混入品として平安時代の石製腰帯具の丸柄が1点出土している。

溝2

調査区北西部で検出した南北方向の溝で、幅0.5m、深さ0.2m、検出した長さは約10mを測る。東側の肩部には土留めの杭が打ち込まれ、水田の用水路として利用されたようである。溝1と同様に、近代の盛土層によって埋められている。溝2は溝1と合流している可能性がある。

溝3

溝2に東肩部を切られている溝で、同一方向である。溝2が埋まった後、掘りなおして溝3が作られている。検出できた溝の幅は0.3m、深さ0.15mである。

2. 第2面の遺構 (図7)

第2面では掘立柱建物3棟、柵列6条、井戸1基、土坑1基、溝3条を検出した。建物や柵列としてまとまらない多数のピットも検出し、建物や柵列の建替えも想定する必要がある。ピットの分布は建物群を中心として、東西30m、南北30mの限られた範囲に集中している。建物4～5は少しずつ方位が異なるが、重複することなく4～5m離して配置し、同時期に存在したものと考える。第2面は奈良時代から平安時代前期の遺構群である

建物4

中央部で検出した掘立柱建物で、東西棟2間×3間、南北4.05m×東西6.6mの規模である。建物の振れはN2°E。桁行方向のスパンは2.2m、梁行き方向は2.0mである。南西隅の柱穴を攪乱で欠く。建物の



图6 第1面平面图

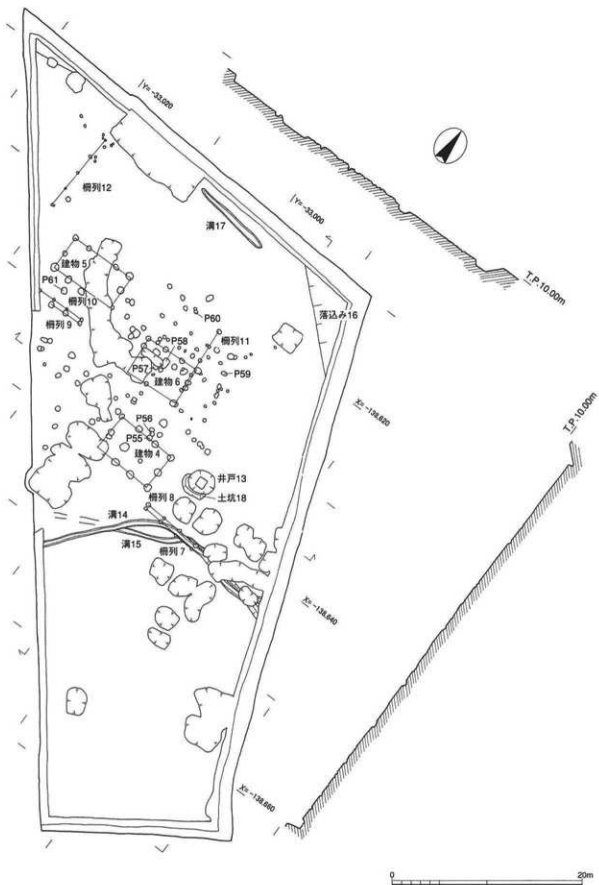


图7 第2面平面图

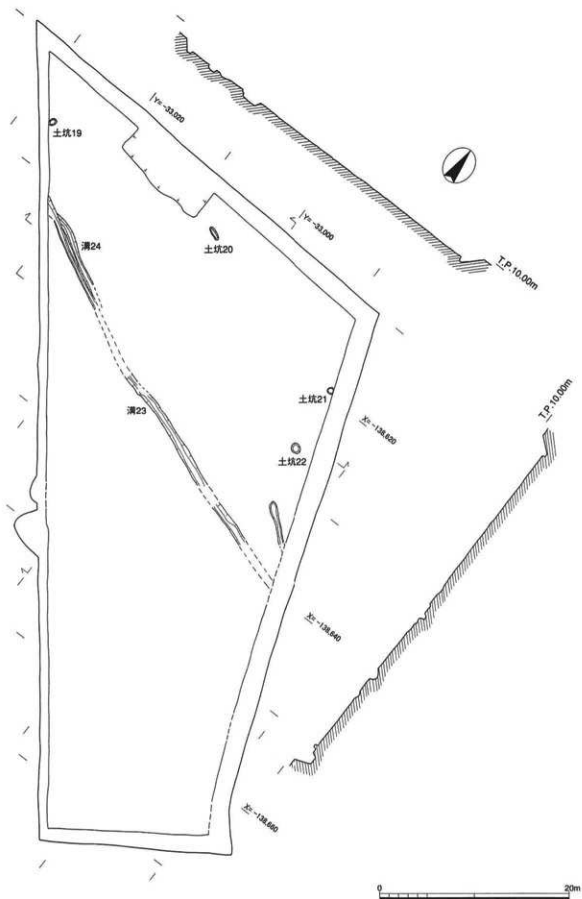


图 8 第 3 面平面图

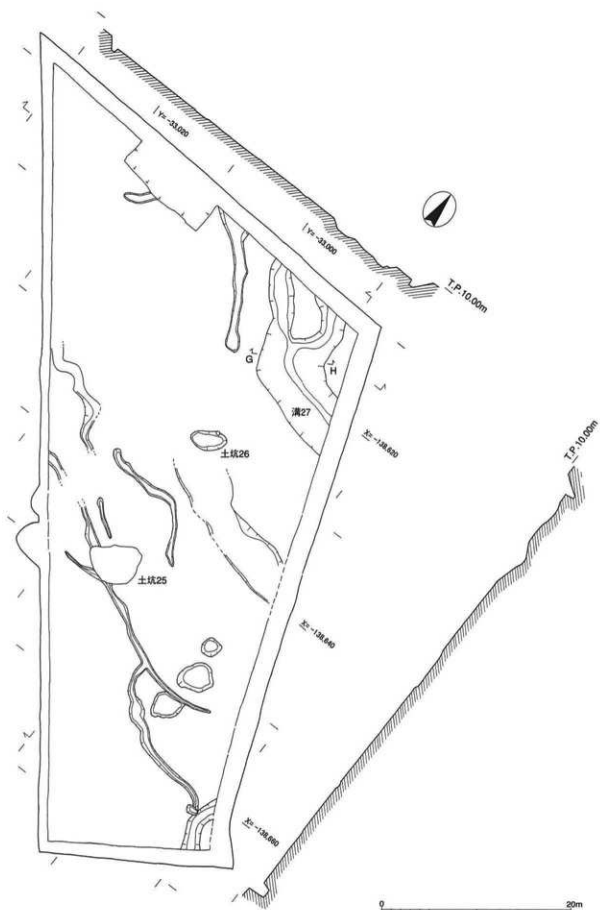


图9 第4面平面图

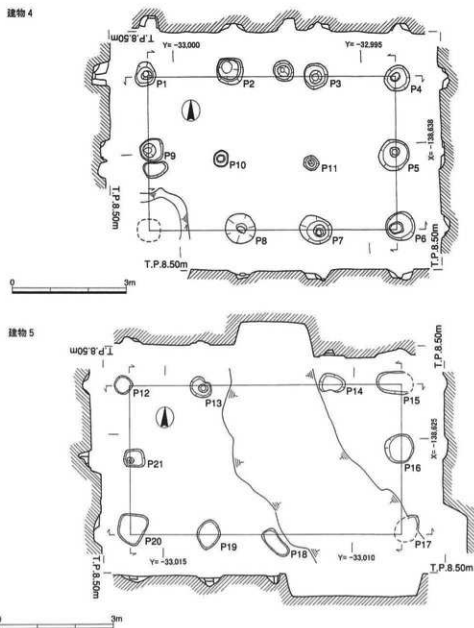


図10 建物4・5遺構図

身舎内にも他の柱穴とは異なり小ぶりな柱穴2基が見られる。板張りの床を支える束と思われる。東北西角と南側柱筋の2基には柱穴底部に根石を据えている。根石は平たい川原石を用いている。柱穴の掘形は隅丸方形に近いもの(P2)もあるが、ほとんどが円形である。柱穴が掘られていた第3層が砂層のため、もともとは方形に掘られたものが、円形になった可能性がある。柱穴P10には柱根(スギ)が残っていた。柱根は柱の芯がわずかに残存しているだけで、柱の太さまでは測れない。柱穴は直径0.5~0.8m、深さ0.3~0.5mを測る。

建物5

北西部で検出した掘立柱建物で、東西棟2間×4間、南北3.8m×東西7.2mを測る。建物の振れはN1°Wと真北方向に近い振れをもつ。中央部を現代攪乱で壊されている。東西方向の柱間スパンは1.8m、南北方向は2.0mを測る。北東隅の柱穴15からは、平安時代の黒色土器碗と土師器甕が出土し、創建年代の目安となった。柱穴は直径0.4~0.8m、深さ0.15~0.4mである。建物5の南側柱筋は建物6の北側柱筋

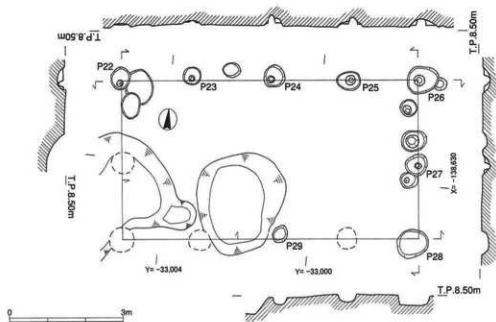


図11 建物6遺構図

に一致するように配されている。

建物6

建物4の北側、建物5の東側に位置し、東西棟2間×4間で、南北4.2m、東西6.0m、建物の振れはN5°W。西側梁行きと南側桁行きの柱穴は南側が攪乱で壊されている。建物6周辺は攪乱とピットが多数認められる。東西方向のスパンは2.0m、南北方向2.1m。柱穴の直径は0.4~0.8m、深さは0.1~0.3mを測る。

柵列7・8

柵列7と8は2列並んで東西方向に通り、柱穴の大きさや柱間が近似し、対となる。建替えかあるいは対として同時期に存在したものが現状では不明であるが、溝14が埋没した後、同じ方向でピットも揃って作られており、密接な関係である。また、井戸13の真南に位置している。どちらもピットの大きさは直径が0.3m、深さは0.25m、柱間は3間で2.15mの等間隔。柵列7の振れはW4°N、柵列8の振れはW3°Nである。

柵列9・10

柵列9・10も柵列7・8と同様に、2列が接近して東西方向に作られている。ただし、柵列9は柱穴の直径が0.5~1.0mとやや大きく、柵列10は0.3mと小さい。柵列9の振れW3°S、柵列10の振れW1°S。柱間は柵列9が2間、柵列10が3間で、いずれも1.8mの等間隔である。

柵列11

建物6の東側梁行にほぼ重複しながら、南北に一直線に通る。建物6と柵列11は柱穴に切りあいが無いため、前後関係は不明。柱間は4間分あり、1.8mの等間隔である。柱穴は平均して直径0.4m、深さ0.15m、柵列の振れはN4°W。

柵列12

調査区の北西部で南北方向に検出した。柵列の柱間は5間で北から2.4m、南3間は2.15mを測る。柱穴P51は長方形で、0.4×0.2m、他はすべて円形で大きさ直径0.2~0.3m、深さ0.1~0.2mを測る。他の

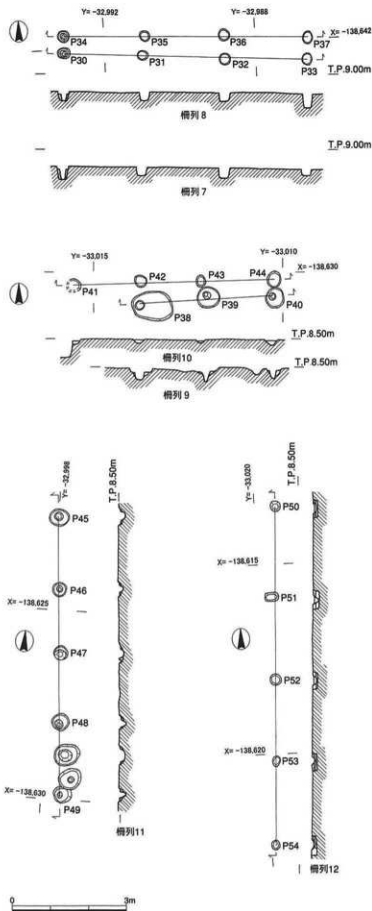


図12 柵列7～12遺構図

柵列と比較すると、大きさが最小である。柵列12より西側はピットが少ないため、この柵列が建物群の西側境界と推測される。柵列の方向はN 3°E。

井戸13

建物4の東側に位置する。大きさは掘形が東西2.8m、南北2.5mの楕円形を呈し、深さは検出面から1.2mである。井戸には方形縦板組の木枠が組まれ、中段に横棧が一段残っていた。木枠の内法は東西0.8m、南北0.85mを測る。木枠の大きさに比べ、掘形の大きさが大きいのは、井戸の周囲が砂層のため、井戸掘削時に崩壊が著しかったためと思われる。井戸の木枠には幅20～40cm、長さ60～80cm、厚さ2～5cm程の不揃いの板材を用いている。横棧は断面長方形の角材の両端に仕口を設け堅牢にしている。板材は平坦な板が多いが、一部湾曲した面に仕上げた板が見られる。この湾曲した板は船材を再利用していると思われる、井戸枠に転用する際に、手ごろな幅に割って用いたものであろう。木枠の上端は腐食し細く尖った状態である。横棧の位置や掘立柱建物の柱穴の深さなどからして、井戸はかなり削平されていると思われる。平安時代前期の土師器や黒色土器が出土している。

溝14・15

調査区の東半は東西方向、中央部で南へ折れて南西方向へ流れる溝である。溝15は溝14より古く、ほぼ同規模であり、流れの方向も重複しているため、溝15が埋まった後、溝14が掘りなおされたと思われる。柵列7・8より古い遺構であるが、時期差はそれほど無いと思われる。溝14の埋土は砂層で幅

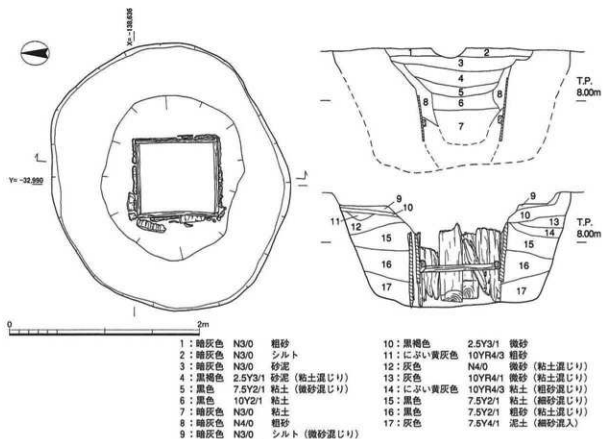


図13 井戸13遺構図

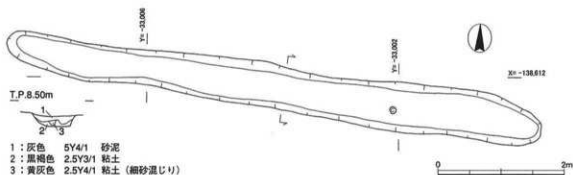


図14 溝17遺構図

0.6m、深さ0.3m、長さは24mにわたって検出した。溝14と15より以南はピットを検出できず、この溝が建物群の南限であろう。

落込み16

調査区の北東部で段差0.3mで東へ落ち込む浅い遺構である。東肩部は検出できていないが、南東から北西へ流れる流路の可能性はある。現在も調査区に沿って南東から北西方向へ水路が流れているため、その前身となる流路と考えられる。

溝17

調査区北端部中央で検出した東西方向の溝である。幅は0.6～0.8m、深さ0.2m、長さ8.6mである。溝の上部を削平され、深い部分の下部のみ残ったものか、長さの短い溝である。出土遺物は少量であるが、土師器碗(図23-32)が出土している。他の溝と異なり、建物群や座標に近い方向の溝である。建物群

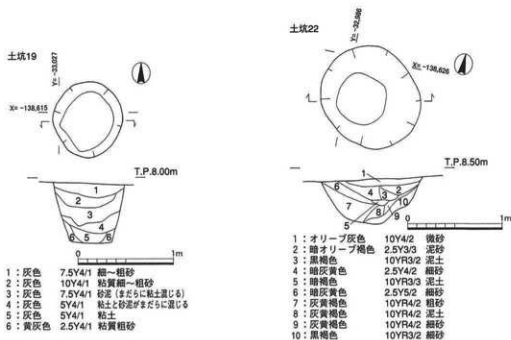


図15 土坑19・22遺構図

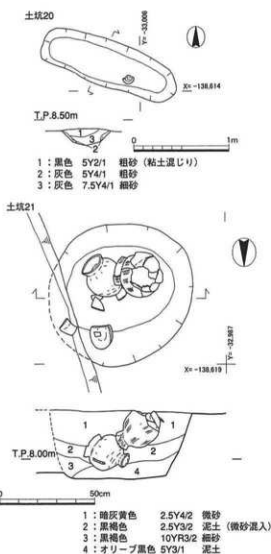


図16 土坑20・21遺構図

の北限を限る溝の可能性がある。

土坑18

井戸13と大部分が重複し、わずかに南側の肩部が遺存している土坑である。井戸13の前身の可能性ある。奈良時代の土師器杯が出土している。直径2.5m、深さ1mの大きさが想定される。

3. 第3面の遺構(図8)

第3面は洪水層と思われる第3層の微砂を除去して検出した遺構面で、古墳時代中期から後期に相当し遺構密度は低い。

土坑19

調査区北西隅で検出した円形土坑。直径0.75m、深さ0.6mで底部が平らな土坑。埋土は粘土と砂が互層となりレンズ状に堆積している。

土坑20

調査区北端中央部で検出した長方形の土坑。大きさは幅0.5m、長さ1.5m、深さ0.2mを測り、中から須恵器蓋(図23-45)が1点出土している。

土坑21

調査区北東部の落込み16に一部壊された状態で検出した円形の土坑である。土師器壺と台杯壺がほぼ完形品で重なって出土した。土坑の大きさは、直径が0.75m、深さが0.35mで、底部は平らである。埋土は底

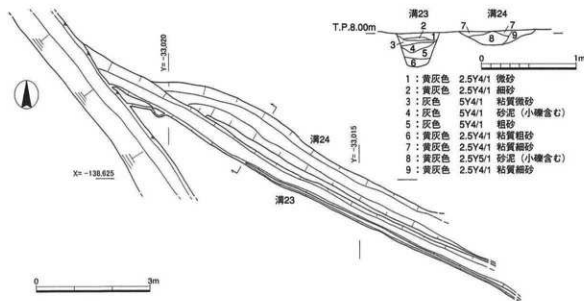


図17 溝23・24北西部遺構図

部にオリブ黒色泥土層、黒褐色細砂、黒褐色泥土、暗灰黄色微砂の順に堆積している。土器の出土状況は、20cm程度黒色泥土層が溜まった後に、完形品の土器を重ねて置いたような状況である。高杯や甕の様相から、古墳時代中期の年代が想定される。完形品が出土している土坑は、当該区の北側に位置する讚良郡条里遺跡(その2)でも、土師器甕や須恵器壺の入った土坑が検出され、遺構の形状や規模も類似している。また、土師器甕も同類の布留型甕で、同時期の遺構と推測される。

土坑22

土坑20の南側で検出した円形の土坑。大きさは直径1.1m、深さ0.5mを測り、底部は皿状にくぼむ。堆積状況は西から流れ込んだように、細砂と泥土が交互に堆積している。須恵器蓋(図23-44)が1点出土している。

溝23・24

溝23は調査区中央部を南東から北西方向へ直線的に流れる溝である。幅60~100cm、深さ40cmを測り、長さ40mにわたって検出した。当該区の東側にあたる小路遺跡(その2)でも、溝23の延長と考えられる溝が木樋を伴って検出されている。小路遺跡(その2)を含めると、約80mの長さにわたって検出したことになる。溝はほぼ一直線に通り、断面もしっかりとしたU字溝を呈しているため、人為的に掘削した溝と思われる。遺物は小片の出土であるが、層位的関係からみると古墳時代に想定される。溝24は23の前身の溝の思われ、北西部では分かれているが、中央部から南は重複している。溝23・24以南からは古墳時代の遺構を検出していないため、遺跡の南を限る区画溝の可能性がある。

4. 第4面の遺構(図9)

第4層の黒色土層を除去し第5層のオリブ黒色土層上面で、土坑と溝を検出した。土坑からは遺物が出土していないが、溝からは縄文土器の小片が出土し、第5面は縄文時代と思われる。

溝27以外にも幅0.3~1m、深さ0.1~0.2m程度の浅い溝がとぎれとぎれで検出された。いずれも、南東から北西方向に蛇行しながら流れている。第3面の溝23・24は直線に走り人工の溝とわかるが、これらの溝は旧地形傾斜面に沿って自然に流れた溝群である。

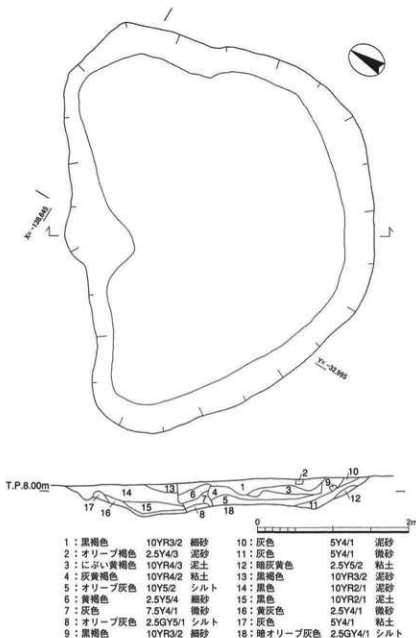


図18 土坑25遺構図

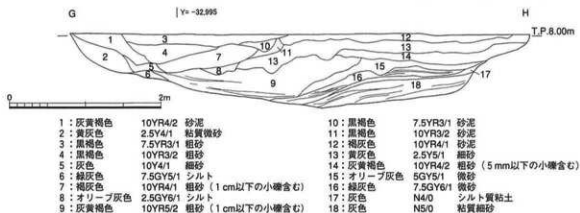


図19 溝27断面図 (G-H)

土坑25

調査区南半部で検出した不定形の土坑である。東西5.3m、南北4.9m、深さ0.4mを測り、断面に特徴がある。埋土をみると、遺構のベースとなる土が逆転したように堆積している。底部も凹凸が見られ、風倒木の痕跡と思われる。強風によって樹木が根ごと倒れ、周囲の土が逆転して堆積したと想定される。

土坑26

土坑25から北へ15mの個所に位置し、大きさは長辺3.1m、短辺1.6m深さ0.3mを測る小判形の土坑である。埋土は土坑25と同様な堆積を示し、遺構のベースとなる4層以下の土層が逆転していることが認められる。また、北西から土が流れ込む様相から、北西方向から南東への風で倒れたと推測される。土坑25も同様な堆積状況を示しているため、同一時期の風倒木跡と思われる。

溝27

北東部で検出した川跡で、東側の小路遺跡(その2)から東

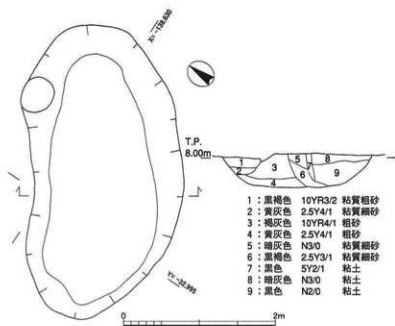


図20 土坑26遺構図

西に流れ、調査区内で北方向へ折れ曲がる。溝27の規模は幅が6.0~8.0m、深さ1.0m程度を測る。北壁付近は溝の底部が二股に分かれる。溝の埋土は粗砂や細砂など砂を主体とする。溝内から縄文土器が少量出土している。調査区の南東隅でも流路の肩部を検出しているが、この流路も溝27につながる可能性がある。調査区の東壁は攪乱も多く断面の観察が困難であったが、砂層の堆積が各所でみられ、東壁沿いに蛇行しながら流れたものと思われる。

第3節 遺物

1. 縄文土器 (図21 1~5)

高宮遺跡や小路遺跡では縄文土器がまとまって出土しているが、当該区でも少量ながら、縄文土器が出土している。1は頸部にあたり、くの字状に屈曲する。頸部の上方外面に凸帯を貼り付け、その上を左方向に竹管で押し引き、その直下に逆C字の爪形文を施す。地文はRLの縄文で内面はナデ調整。胎土は石英・長石・雲母を多く含み、焼成良好、色調は黒褐色。確認トレンチ2の灰色砂礫層より出土。2は体部にあたり地文にRLの縄文を施し、縦位の凸帯を貼り付け、竹管で押し引きする。内面は丁寧なナデ。胎土は石英・長石・雲母を含み、焼成良好、色調は灰黄褐色。確認トレンチ2の灰色粗砂層より出土。3は体部の破片で、地文にRL縄文を縦走させ、縦位に凸帯を貼り付ける。内面は丁寧なナデ調整。胎土は石英・長石を多く含み、焼成やや軟質、色調は灰黒色。確認トレンチ2の灰色シルト層より出土。4は体部でRLの縄文を縦走、撚りはゆるく細めの原体である。内面はケズリで煤付着。胎土は石英・長石を含み、焼成良好、色調は灰白色。確認トレンチ2の灰色粗砂層より出土。5は体部で、外面は条痕で調整、内面は剝離しているため調整不明。胎土は石英・長石を含み、焼成軟質、色調は灰黄褐色。溝27より出土する。1~3は縄文時代前期末の大蔵山式、4と5は縄文時代中期の船元式と思われる。

2. 土坑21出土の土器 (図22 6~10)

土坑21の出土土器には台杯壺1点、壺2点、高杯の杯部1点と脚部1点がある。6は東海地方特有の台杯壺の完形品である。ほぼ球形の体部を呈し、底部には外方へ開く台を貼り付け、くの字型の口縁部である。体部の下半部外面はヘラケズリ、上半部は軽いケズリの後にナデ調整、内面はヘラナデ。頸部にヘラの圧痕がみられる。口縁部は外方へ開き、端部は丸く横ナデ。体部下半には粘土紐のつなぎ目が残る。台の外面はナデ調整、内面は丁寧にヘラケズリ。口径13.6cm、胴部の径は19.8cm、器高24.5cmを測る。胎土は石英と長石を含み、焼成やや軟質、色調はにぶい黄橙色。7もほぼ完形品の壺であるが、土圧で押されてひずみが生じている。体部はほぼ球形で、外方へくの字に開く口縁部がつく。口縁端部

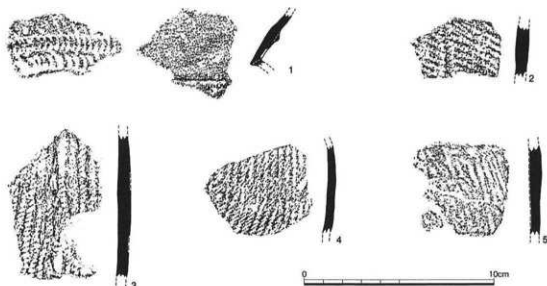


図21 出土遺物 縄文土器

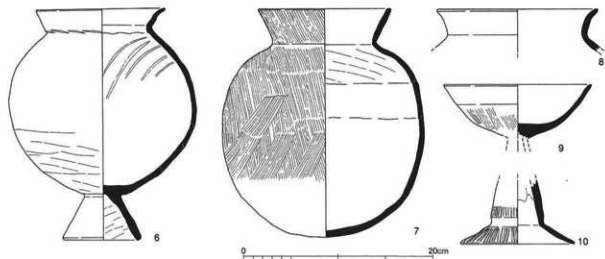


図22 出土遺物 土坑21

は平坦面をなす。体部外面の調整は底部を除き、丁寧にハケ目を施す。底部はハケ目の後ナデ調整。頸部から口縁部にかけての外面もハケ目がみられ、内面は横ナデ。体部内面はナデ調整で、頸部付近をヘラでなでている。体部内面には粘土紐のつなぎ目が残る。胎土は赤色粒（くされ礫）を含み、焼成やや軟質、色調はふい黄橙色から灰黄色。口径は14.1cm、器高は24.2cm、胴部の径21.5cmを測る。8は甕の頸部から口縁部にかけての破片で、口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。外面内面とも横ナデ。胎土は砂粒を多く含み、焼成は軟質、色調はふい橙色。9は高杯の杯部にあたり、脚部が杯部との接合部分ではずれている。杯部は碗形を呈し、外面はハケ目、口縁部外面から内面は横ナデ。脚部との接合部は中心にくぼみをつけている。胎土は微砂粒を含み、焼成軟質、色調はふい褐色。杯部の口径は15.7cmを測る。10は高杯の脚部で、杯部は欠損している。脚には外面に幅広い凹線を施し、屈曲点として外方へ大きく開く。外面は縦方向のヘラミガキ、内面はオサエとナデ。胎土は石英と長石を混入し、焼成良好、色調はふい黄橙色。脚部の径は12.1cm。9と10は接合しないが、同種の高杯である。

これらは一括で埋納されたように出土しているため同時期性が高い。土坑21から須恵器は出土していないが、古墳時代中期布留式後半の段階と思われる。

3. 井戸13出土の土器（図23 11～25）

井戸13からは平安時代前期の土師器杯・羽釜、黒色土器皿・碗が出土している。土師器杯（11～16・18～20）は器高指数（器高／口径×100）がほぼ20から25程度で、底部から体部、口縁部にかけて斜め上方へ立ち上がる。口縁端部は内側へ肥厚（13）、わずかに外反（11・12・15・16・18）、上方へつまみあげるように横ナデするもの（14・20）がある。口径は12.2～16.3cmを測る。17は器高指数が30.3で、碗とする。底部から口縁部にかけて内湾しながら上方へ立ち上がり、口縁部内面に浅い凹線を施す。井戸13では器高指数20以下の皿は出土していない。25は摂津C型の羽釜で、直立した口縁直下に鈿を貼り付けている。外面は縦方向にハケ目を施した後に、分厚い鈿を貼り付け、粘土を補強して横ナデ。鈿の端面、口縁部端面、口縁部内面を強くナデてくぼませる。鈿の接合部に対応する内面は横ナデし、その下はオサエのみ。内面に煤が付着している。口縁部の径は24.0cmを測る。胎土は微砂粒混入、焼成良好、黄灰色を呈する。

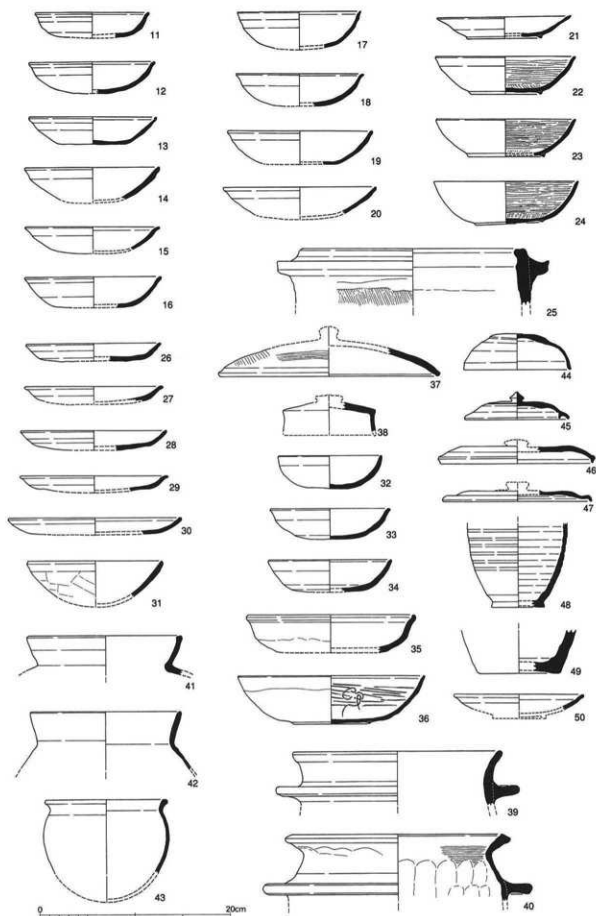


図23 出土遺物 井戸13・土坑・落込み・溝・ピット・第2層

21は黒色土器の皿で、断面三角形の小さな高台を貼り付ける。体部内面は風化し調整は不明瞭、外面はナデ調整。口径14.2cm、器高2.2cmを測る。22～24は黒色土器の椀で皿21と同様な断面三角形の小さな高台を貼り付ける。口縁部は沈線を施さず丸くおさめる。外面は黒色化せずに内面だけを黒色炭化させたAタイプである。内面見込みは一定方向のミガキ、体部内面は横方向のミガキを施す。外面は軽くケズリの後、オサエとナデで調整。口径は14.9cm～15.3cm、器高は4.0cm～4.6cmを測る。

4. 土坑・落込み出土の土器 (図23 28・35：土坑18 44：土坑22 45：土坑20 49：落込み16)

土坑18から土師器皿(28)と土師器杯(35)、土坑20から須恵器杯蓋(45)、土坑22から須恵器蓋(44)が出土している。土師器皿(28)は器高指数13.5、口径15.6cmで井戸13出土土器と同時期と思われる。杯(35)は口縁部を外反させてから、内側へ折り曲げ、沈線を施す。須恵器杯蓋45は口縁部に短いかえりをつけ、外面頂部に頭部の尖った疑宝珠を貼り付ける。須恵器蓋44は口径が11.5cmと小さい。口縁部から体部まで横ナデで頂部はヘラおこし未調整。落込み16出土の灰軸陶器壺(49)は底部の破片で、体部と口縁部の形状は不明。厚さは1cmほどあり、体部から底部にかけて軸葉がかかる。

5. 溝出土の土器 (図23 32：溝17 38：溝23)

溝17出土の土師器椀(32)は器高指数31.5で、井戸13出土の土師器椀(17)の30.3と類似する。土師器蓋(38)は溝23からの出土で、体部から口縁部にかけてほぼ直角に折れ曲がる。頂部は欠損しているが、平たい疑宝珠がつくと推測される。

6. ビット出土の土器 (図23 26：P4 27：P58 29・34：P24 30：P57 31・48：P55 33：P56 36・43：P15 39：P1 40：P32 41：P60 46：P59 47：P61 50：P13)

1区の北半部、2区の南半部で多数の柱穴を検出したが、柱穴の中から多種の土器類が出土している。土師器には皿(26・27・29・30)、杯(31・33・34)、甕(41・43)、羽釜(39・40)がある。土師器杯(31)は体部外面をヘラケズりするいわゆるc手法である。羽釜(39・40)は口縁部より下位の肩部及び頸部に、鐙を水平に貼り付ける河内B型である。鐙は幅広く端部を丸く横ナデする。39は口縁部を外反させて端部を丸くおさめるが、40は口縁部を強く外反させて、端部に平坦面を作る。40の体部内面には指オサエ匠痕が明瞭である。

土師器以外には黒色土器椀(36)と緑軸陶器皿(50)、須恵器には蓋(46・47)と壺(48)がみられる。黒色土器椀(36)は底部に断面三角形の小さな高台を貼り付けている。体部内面はヘラミガキと暗文を施す。口縁部内面に浅い沈線がみられる。須恵器蓋(46・47)はいずれもつまみ部を欠くが、頭部の平たい疑宝珠がつくと思われる。蓋の口縁部は直角に屈曲する46とS字形に湾曲する47がある。須恵器壺(48)は底部から体部にかけて破片で、底部は糸切りのままで高台はつかない。体部は内外面とも水引き成形の凹凸が激しい。緑軸陶器皿(50)は口縁部だけの破片で、オリーブ灰色の軸葉がかかる。

7. 第2層出土の土器 (図23・24 37・42・51～57)

第2層からは古墳時代から中世までの土器が出土している。51は瓦器椀で、底部に断面三角形の小さな高台を貼り付けている。外面にミガキはなくオサエとナデ調整。内面は粗いヘラミガキ。口径16.2cm、器高3.7cmを測る。37は口径23.6cmを測る大型の土師器蓋である。体部外面にはヘラミガキがみられ、



図24 出土遺物 第2層

頂部は欠損しているが、疑宝珠がつくと思われる。土師器甕(42)は頸部から口縁部がくの字型に折れ、口縁端部を丸くおさめる。52・53は甕で、くの字形に外反する頸部に丸くおさめる口縁端部がつく。52は内外面ともナデ、53は内外面にハケ目と思われるが、摩滅している。54は甕の底部、55は高環の脚部である。56は須恵器の杯身でやや立ち上がりの長い受け部がつく。口縁端部は丸くおさめ、体部外面のヘラ削りは浅い。口径は13.2cm、器高は3.5cmを測る。57は高台をもつ杯身。頸部より上を欠くため、器高・口径は不明。

8. 第3層出土の土器(図25 58~73)

第3層からは古墳時代から奈良時代の土器が混在して出土している。土師器皿(58)は体部から内湾しながら立ち上がり、口縁端部の内側に平坦面をつくる。皿(59)は口縁端部を丸くおさめ内側に沈線を設ける。口縁部外面は2段の強い横ナデ、底部外面はオサエで凹凸あり。内面は丁寧なナデ。土師器杯(60)は体部を内湾させ上方へ立ち上がる。口縁端部は丸くおさめ、体部外面はオサエと横ナデ、内面

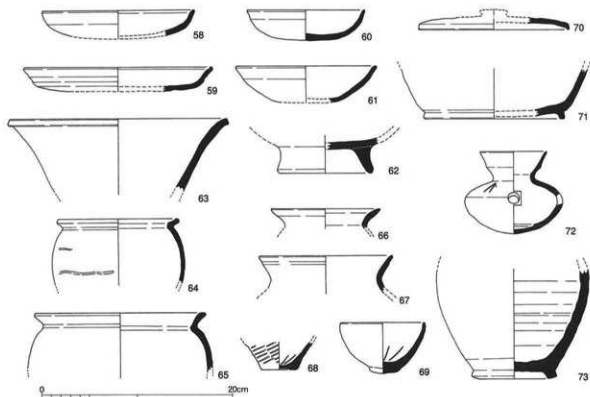


図25 出土遺物 第3層

はナデ調整。61は小さい底部に外方へ開く体部をもち、口縁端部は丸くおさめる。端部内側に浅い沈線が残る。63は土師器高杯の杯部、62は土師器台付盤で高い台をもち、体部は欠損しているため、大きさや形状は不明。63は大型の高杯の杯部である。杯部は腰部付近角度を付けて大きく外反するもので、口縁端部は平坦面をなすように強く横ナデする。石英・長石などの砂粒を含み、焼成良好、明赤褐色を呈する。64～68は甕で64・65は頸部が短いく字に外反する。体部は内外面ともにオサエとナデ調整。66・67は64・65よりやや頸部が長く単純に外反する。68は中央部がややくぼむ甕の底部で、外面に左下がりの叩き板の痕跡を残す。69は小型の鉢で口縁部を内湾させて立ち上がる。底部は丸底ではないが、すわりは悪い。

70は須恵器蓋で口縁部を下方へ短く屈曲させる。つまみは欠くが平たい疑宝珠がつく。71は大型の須恵器杯で高台をもつ。72は甕でやや胴の張る体部に斜め上方から穴を明け、軽い段をつけた頸部に外方へ開く口縁部がつく。口縁部は薄く仕上げている。体部の肩部には水鳥の足のようなヘラ記号が描かれている。体部外面の下半は軽いケズリ後丁寧なナデ調整。口径7.1cm、胴部の径10.4cm、器高8.7cmを測り、口径より胴部の径が大きい。胎土は砂粒が少なく、焼成良好、色調は灰色を呈する。73は須恵器の甕である。肩部より上を欠く。底部外面には糸切り痕跡が残り、外方へふんばる高台がつく。体部内面には水引き成型の凹凸がみられる。胎土は微砂粒が含まれ、焼成良好、色調は灰色を呈する。

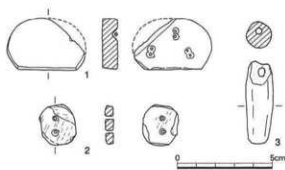


図26 出土遺物 石製品・土製品

9. 石製品 (図26 1・2)

溝1から平安時代の石製腰帯具(1)が出土している。丸柄と呼ばれる革製の帯につける飾り具で、一部欠損しているが丁寧な作りである。小判型の長辺を切り取った形状を呈し、裏面には革帯に飾りつけるための小穴が3箇所穿たれている。直径0.1cmの小穴は裏面から断面U字形に空けている。裏面以外の表面と側面を丁寧に研磨している。縦2.7cm、横4.1cm、厚さ0.9cmを測り、石材は石英を主成分とする珪岩で灰白色を呈する。

石英を主成分とする珪岩で灰白色を呈する。

双孔円板(2)は第3層から出土している。長方形の角を削り取ったやや不整形の板状である。中央部に2箇所の紐穴を貫通させている。縦は2.1cm、横1.8cm、厚さ0.4cm、紐穴の直径は0.15cmを測る。両面ともに荒い研磨の痕跡が斜め方向にみられる。石材は滑石。古墳時代の石製模造品と思われる。

10. 土製品 (図26 3)

土鍾(3)が1点、井戸13から出土している。粘土板を棒状の器具に巻きつけて成形したものである。一部欠損しているが、残存長4.3cm、胴部の最大直径1.4cm、穴の直径0.3cmを測る。焼成は軟質である。古墳時代の土鍾であろう。

11. 木製品 (図27～30)

木製品はすべて井戸13から出土し、方形井戸の井戸枠として用いられていた。1～5は湾曲している形状から船材と思われる部品である。船を幅10～40cm、長さ70～80cm程度の大きさに割って井戸枠とし

て再利用したものである。長さは井戸枠上面が腐食しているため、かなり短くなっている。1・2・5は側面が原型を保つが、3・4は両側面とも割れている。1は外面に緩い曲線をつけて平滑に仕上げる。側面も平滑に仕上げ、深さ4cmのくぼみを設けている。5には側面から20cmほど下位に楕円形と方形の穴を穿つ。2も外面と側面を平滑に仕上げているものの、2には特別な細工は見られない。1・2・5は側面の調整の様子から船縁の一部ではないかと想定される。6～14は平坦な板材でさまざまな細工が見られる。7は溝を掘り、ホゾ状の突起を設ける。8は段を有し、小穴を穿つ。9・10は側面から切りこみがある。15～18は井戸枠の横棧に用いられていた角材である。角材の先端にほぞ(16・17)とほぞ穴状(15・18)に仕口を設け、堅牢に組み合わせるように細工している。

表1 木製品観察表

木製品番号	用途	樹種	全長(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	細工
1	船材	スギ	74.8	34.4	4.8	割り込み
2	船材	スギ	82.4	23.8	7.8	—
3	船材	スギ	83.0	39.0	9.5	割り込み
4	船材	スギ	67.0	9.0	4.8	—
5	船材	ヒノキ	79.6	29.6	5.8	穿孔
6	—	スギ	75.4	24.0	5.0	—
7	—	スギ	80.6	19.8	5.0	—
8	板材	ヒノキ	68.5	26.2	3.4	穿孔
9	板材	スギ	58.2	16.2	3.0	割り込み
10	板材	スギ	58.2	15.0	3.5	割り込み
11	板材	スギ	69.0	27.5	4.0	—
12	板材	スギ	49.3	30.2	4.0	穿孔
13	板材	ヒノキ	57.4	29.0	3.6	段
14	板材	スギ	55.0	30.0	4.0	穿孔
15	横棧	ヒノキ	87.3	7.8	4.6	仕口
16	横棧	ヒノキ	87.2	8.1	4.8	仕口
17	横棧	ヒノキ	86.7	7.6	4.2	仕口
18	横棧	スギ	86.5	7.8	4.6	仕口

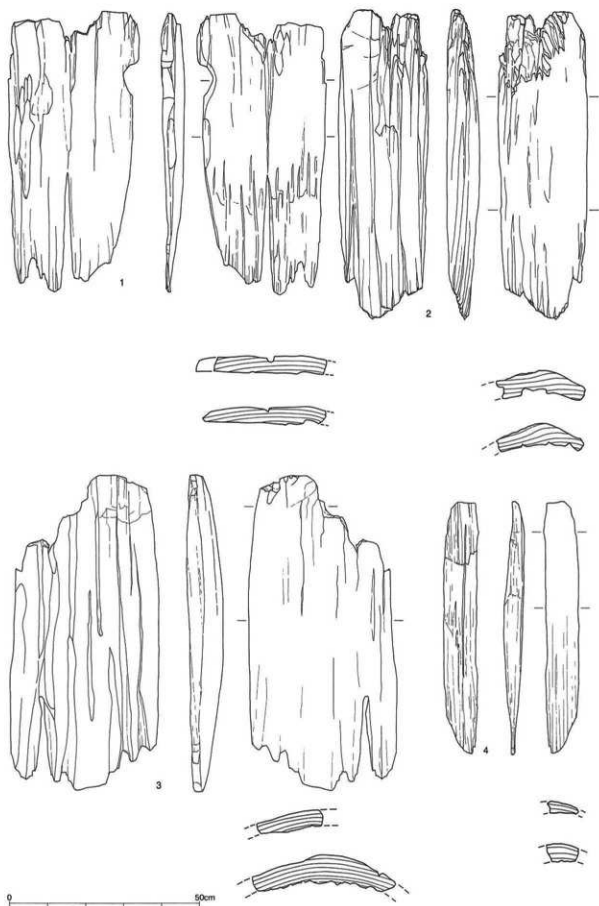
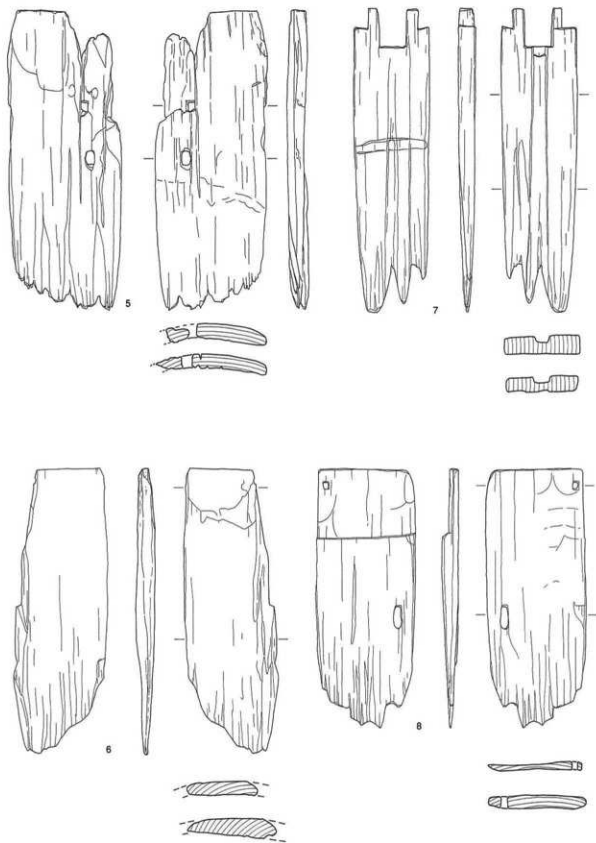


图27 出土遺物 木製品 1



0 50cm

图28 出土遺物 木製品 2

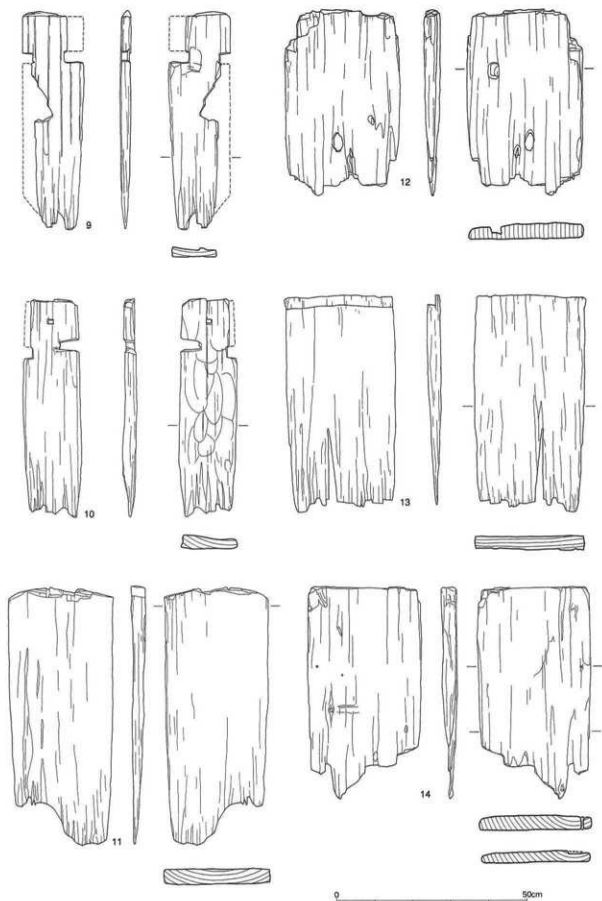


图29 出土遺物 木製品 3

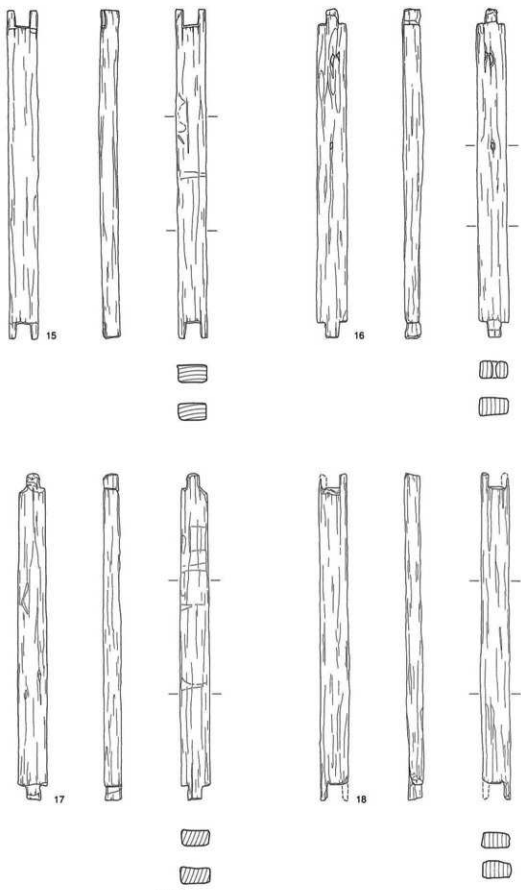


图30 出土遺物 木製品 4

第4章 まとめ

下層確認トレンチでみられた縄文時代の流路は規模を確認できていないが、現地形の水路と同じように、流れの方向は南東から北西へ向かって流れている。第4面で検出した溝も同様である。流路の下部で検出した流木、および第4面の土坑25・26の風倒木跡をみると、縄文時代には樹木が茂った林を形成していたのであろう。流路を覆っている第4・5層より上は安定した土壌となり、以降は大規模な流れ堆積はなく、小規模な川や人為的な溝が形成される。縄文時代後期から弥生時代中期までの遺物は認められず、弥生時代後期から土器が出土し始め、この頃から当該地の開発が開始されたことを示している。

古墳時代中期頃から土坑や溝などの遺構が検出され始めるが、遺構の密度は低く、また遺物量も少ないため、集落の周辺部と想定される。立地からみても東方の丘陵部が居住区となるのであろう。高宮遺跡の調査では古墳時代中期の堅穴住居跡が検出され、そのことを裏付けている。土坑21より出土した台付甕6は東海地方にみられる特徴的な器形で、注目される遺物である。河内と東海地方との関係を探る貴重な資料となろう。東海地方伊勢湾沿岸の台付甕にはS字口縁、くの字口縁、口縁端部に平坦面を持つ宇田型甕と3種がみられ、くの字甕にも外面ハケ目調整とナデ調整がある。当該遺跡の台付甕6は外面をナデ調整するくの字甕である。年代はややさかのぼるが、本調査地に隣接する小路遺跡（その3）では、東海地方で多く検出されている前方後方形周溝墓がみつきり、伊勢湾地方の土器も出土しているため、土器の移動や人の交流が認められる。ただし、これらの遺構は単発であるため頻繁な交流とはいえないであろう。

これらの遺構を覆っている第3層は古墳時代から奈良時代の遺物を包含する砂層であるが、調査区の東側を流れる川から氾濫した砂と推定している。落込み16はその西西部であろう。

平安時代前期の掘立柱建物群は周辺の調査と合わせてみても、同時代の大规模な広がりにはみられず、当調査区を中心とする小規模な建物群と思われる。しかし、古代律令制の身分を示す石製腰帯具（丸軋）の出土や、隣接して実施した讚良郡条里遺跡（その1）の絵馬・人面墨書土器などの祭祀遺物、丘陵地の高宮遺跡で検出された奈良時代の大型建物との関連が注目される。当調査区の建物群は両遺跡から時代はやや下がるものの、密接な関係が予想される。井戸の木枠に再利用されていた船材は、小さく破砕されていたため、その船の全貌を復元することはできないが、当地から南方へ広がる河内湖で使用されていた喫水の浅い川船を想定している。長保寺遺跡では古墳時代の船材が、井戸の木枠として再利用されていたが、廃船は建築部材とともに井戸枠として利用しやすい材料だったのである。

讚良郡条里と茨田郡条里については、条里制を表す坪番号が小字名に残されており、古くから条里制の研究が行われてきた。讚良郡条里は小路・高宮地区において「一の坪・三の坪・四の坪・五の坪・九の坪・十の坪・十四・十五・十八・十九・廿坪・廿壱」の小字名があり、条里復元にとって貴重な資料である。讚良郡条里九条は讚良川を南限として、南東隅の一の坪から北へ千鳥に並ぶ。茨田郡条里は東北隅から南へ始まる。本調査区ではわずかに、四の坪にかかるだけであるが、溝2が推定線上に合致する。小字名は認められないが、調査区南端部の東西溝（溝1）も三・四の坪境を延長した線上にあり、東へ一坪拡張されている可能性がある。この拡張された東限の境界線は高宮大社御祖神社の参道と呼ばれている道である。

本調査では讚良郡条里の施行時期を明らかにすることができなかった。溝1・2ともに近世の溝で、

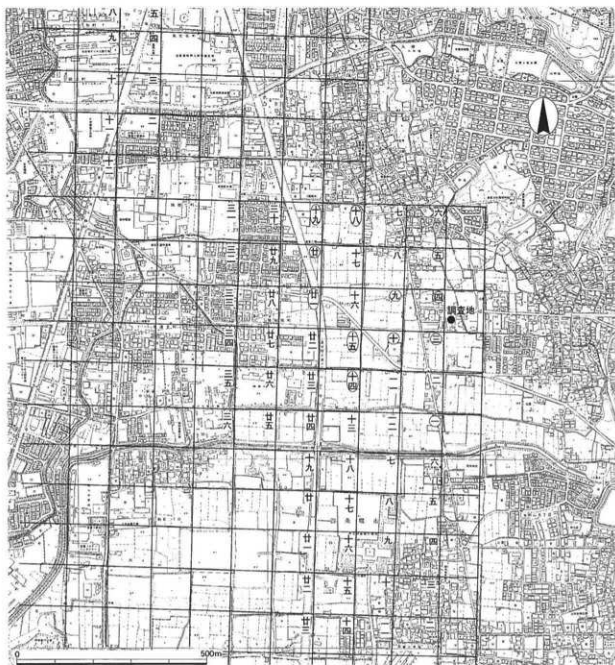


図31 讚良郡条里復元図

(漢数字の丸囲みは「明和年代村絵図」「ふるさと高宮
いまむかし—続資料史編」に記載)

中世まではさかのぼらないが、鋤溝は室町時代と思われるものも存在するため、水田の開発はこの頃から始まっているかも知れない。しかし、平安時代まで上がることはないと思われる。现阶段では中世に讚良郡条里の地割が行われた可能性を示しておきたい。

参考文献

大字高宮財産管理委員会 1999年『ふるさと高宮いまむかし—続資料史編』

一瀬和夫・田中龍男ほか編 2002年『讚良郡条理道跡、小路道跡、打上道跡、茄子作道跡、藤阪大亀谷道跡、長尾窟跡道跡、長尾東地区』(財)大阪府文化財センター調査報告書 第77集

写 真 图 版



1. 調査地遠景 (南西から)



2. 調査地遠景 (南から)



垂直写真（1区第2面）



1. 1区第1面全景（北から）



2. 1区第2面全景（北から）



3. 1区第3面全景（北から）



1. 2区第2面全景（西から）



2. 2区第3面全景（西から）



3. 2区第4面全景（西から）



1. 1区第2面建物4 (北から)



2. 2区第2面柱穴群 (東から)



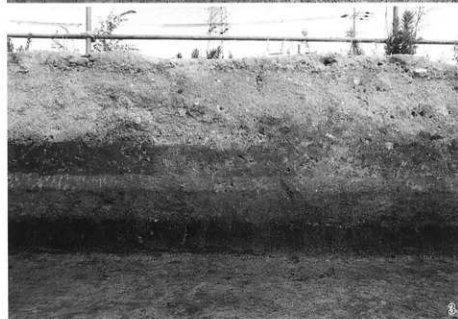
3. 2区第4面溝27 (北西から)



1. 確認トレンチ2全景（南から）



2. 確認トレンチ2流木（西から）



3. 1区北壁断面（南から）



1. 1区第2面井戸13 (東から)

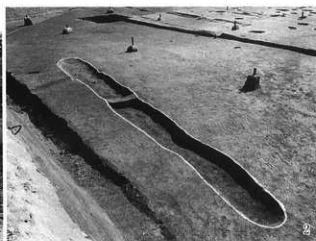


2. 2区第3面土坑21 (北から)

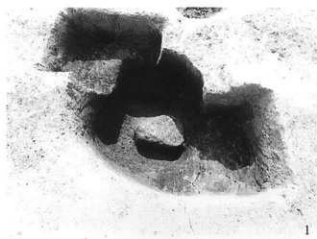


3. 2区第3面土坑21 (南東から)

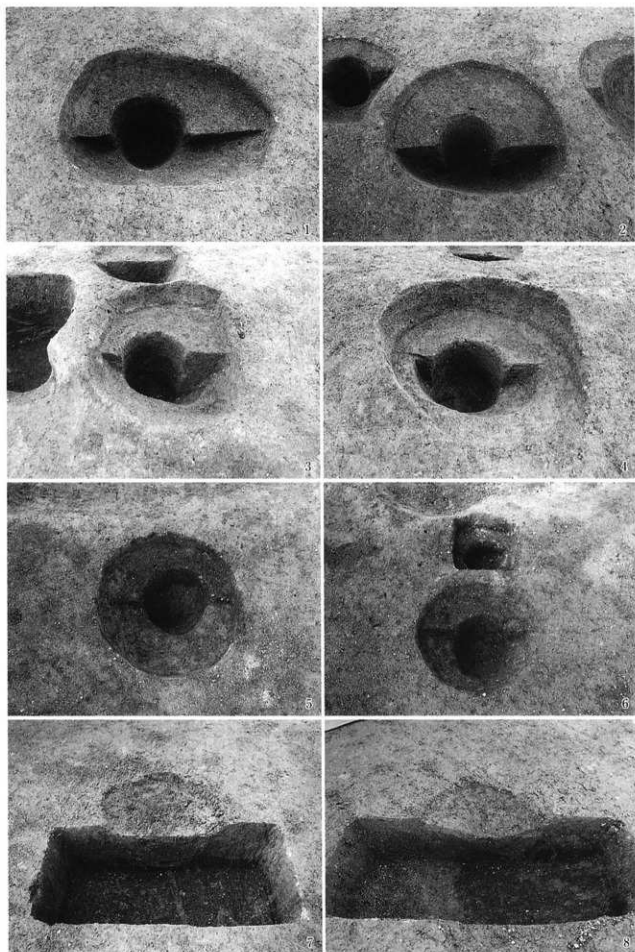
写真図版 8 遺跡



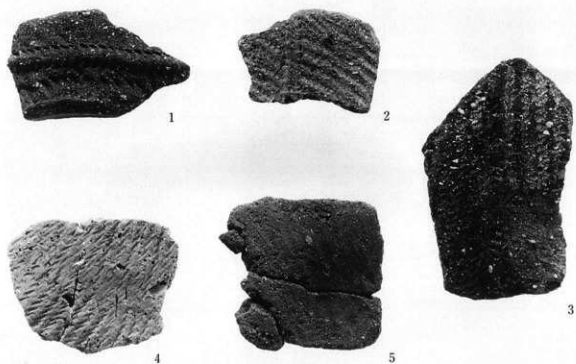
1. 溝1 (西から) 2. 溝17 (北西から) 3. 土坑22 (南から) 4. 土坑20 (北東から)
5. 溝23 (北西から) 6. 溝23・24 (北西から) 7. 土坑26 (北東から) 8. 土坑25 (北東から)



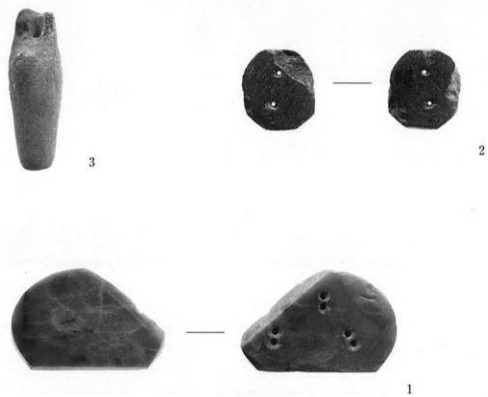
1. 建物4-P1 2. 建物4-P2 3. 建物4-P10 4. 建物4-P11
5. 建物4-P7 6. 建物4-P8 7. 建物5-P15 8. 建物6-P24



1. 建物6—P25 2. 建物6—P27 3. 柵列9—P40 4. 柵列9—P38
5. 柵列11—P45 6. 柵列11—P46 7. 柵列12—P52 8. 柵列12—P54



1. 縄文土器



2. 石製品 (1・2)・土製品 (3)



6



7



9



10



69



43



32



60



24



36



45



72



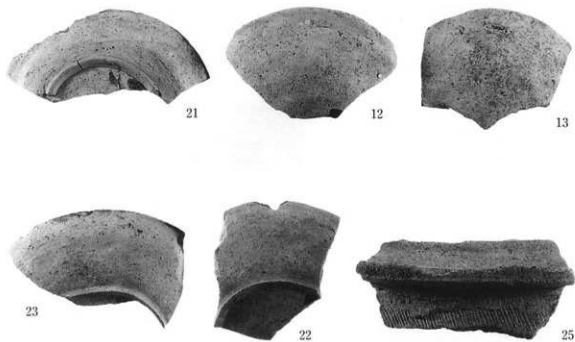
44



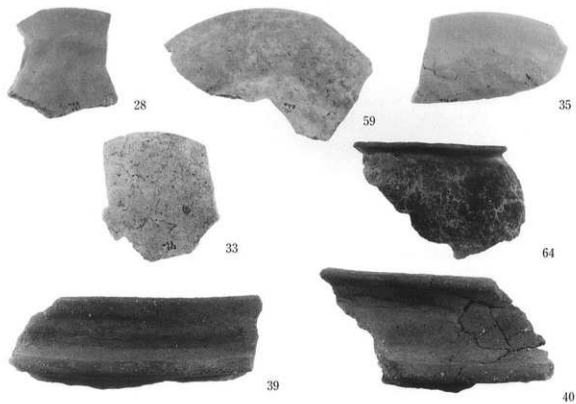
48

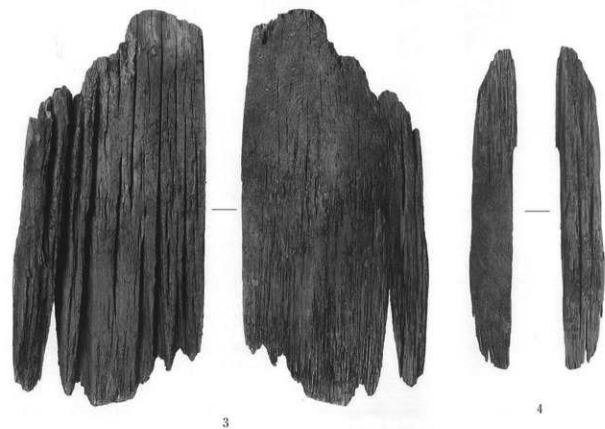
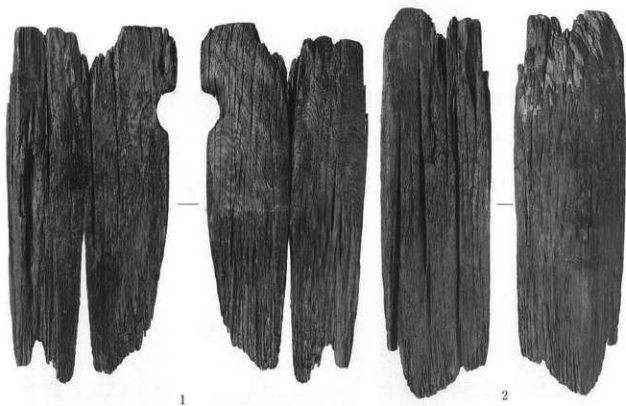


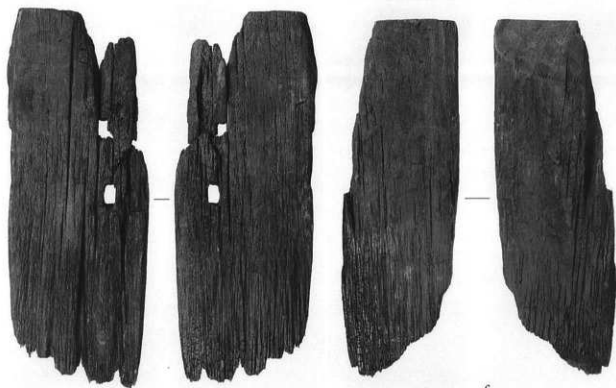
73



1. 出土土器3 井戸13

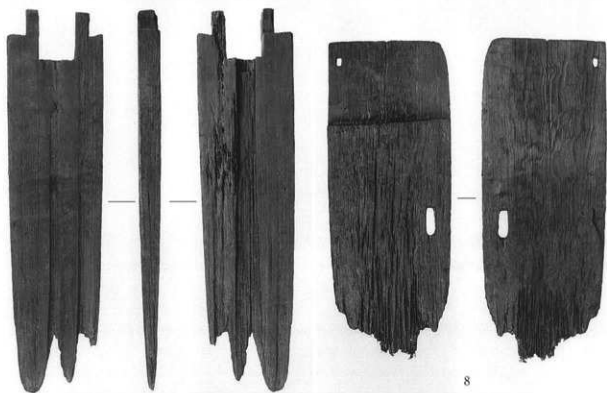






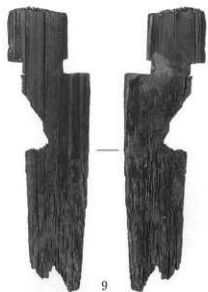
5

6

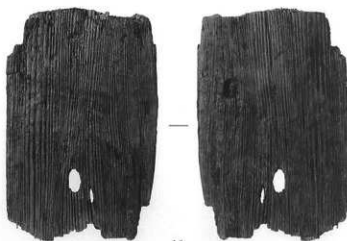


7

8



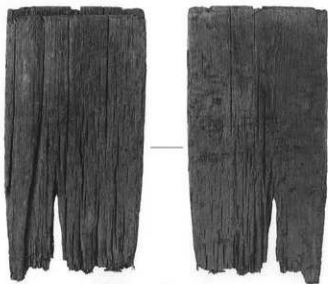
9



12



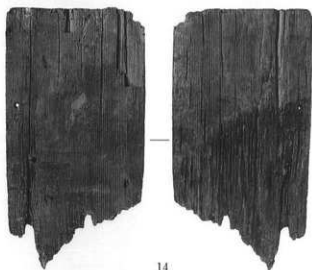
10



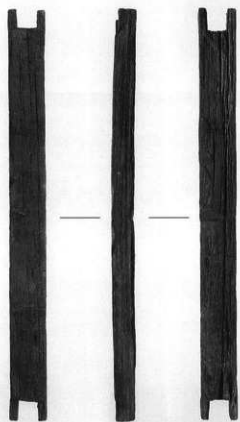
13



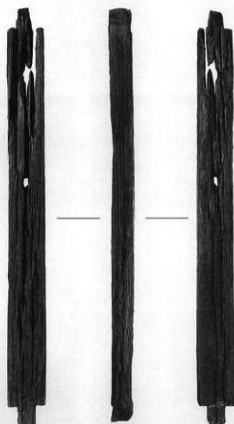
11



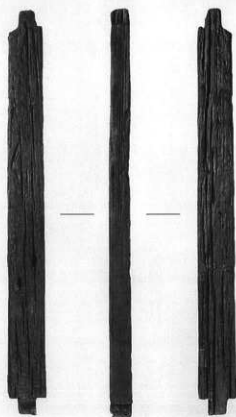
14



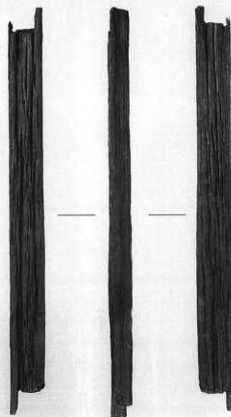
15



16



17



18

報告書抄録

ふりがな	さらぐんじょうりせき							
書名	讃良郡条里遺跡（その3）							
副書名	一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	（財）大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第114集							
編著者名	前田義明							
編集機関	（財）大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21-4 大阪府教育委員会文化財調査事務所3階							
発行年月日	2004年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
讃良郡条里遺跡	寝屋川市高宮・小路	27215	36	34°45'10"	135°38'12"	2002.3.1 ～2003.2.28	1851 m ²	第二京阪道路（大阪北道路）建設に伴う
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
讃良郡条里遺跡	集落	縄文時代 古墳時代 平安時代 中世	流路 土坑・溝 掘立柱建物・櫓列・井戸 溝	縄文土器 土師器・須恵器 土師器・須恵器・黒色土器・石製腰帯具 土師器・瓦器	平安時代の井戸を伴った掘立柱建物を検出			

（財）大阪府文化財センター調査報告書 第114集

讃良郡条里遺跡（その3）

一般国道1号バイパス（大阪北道路）第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日：2004年3月31日

編集・発行：（財）大阪府文化財センター

〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21番4号

大阪府教育委員会文化財調査事務所3階

TEL072-299-8791 FAX072-299-8905

印刷・製本：鶴じんのう

